

社会言語学会の会員の皆様へ

学会誌編集委員会委員長
荻野綱男

学会誌編集委員会から特集論文の募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、「特集・日本語と言語接触」の論文を募集しています。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。原稿の書き方、投稿のしかた、投稿先などは、通常の論文の場合と同じです。投稿に際し、「特集」のための論文であることを明記してください。

論文投稿の締切：2000年1月31日 掲載号の発行：2000年9月（予定）
--

特集・日本語と言語接触

日本語は「島国の孤立した言語」と捕らえがちであるが、その歴史は、見方によっては言語接触の繰り返しとでも言えそうである。この特集では、過去または現在、日本語と他の言語との間で起きた（起きている）言語接触の実態を追究する。

日本語という言語そのものも複数の言語体系との接触によって誕生したという様々な説がある。以降、中国、朝鮮半島、アイヌなどとの接触によって、語彙が借用された。室町時代には、周辺民族だけでなく、日本人は西洋の様々な言語を使う人と接触し、二言語使用、借用語、語学学習、通訳といった言語接触現象が生じた。近世には、日本人の海外移住がはじまり、マニラやシャムなど東南アジア各地で日本人町の出現により、他言語の話者との接触が起きた。

近代のテーマとして、横浜などの開港で使われたピジン・ジャパニーズ、アイヌ人や小笠原先住民の言語的同化と二言語生活、日本人移民と言語接触（ハワイ、ブラジルなど）、植民地の先住民の二言語使用や日本人入植者との間の言語接触、終戦直後に日本人と占領軍の米兵との間に使われたバンブー・イングリッシュなどが考えられる。

現在は、永住型在日外国人（朝鮮・韓国人、華僑など）、定住難民、外国人労働者の言語教育・母語保持・二重言語生活、残留孤児や帰国子女の言語適応など新たな言語接触現象が生じている。

言語行動の現象としての言語接触（コード切り替えなど）、あるいは言語接触の歴史的過程（労働移民など）以外にも、言語接触の結果として生じた言語事象（ピジンや借用語）など、様々な観点からの研究論文が期待される。ただし、「社会言語科学」という名にふさわしいように、「接触するのは言語そのものではなくて、言語を使う人間である」という立場から書かれており、またそれを読者に考えさせる研究論文が望ましい。

問い合わせ先： 荻野綱男 E-mail: ogino-tsunao@c.metro-u.ac.jp Fax: 0426-77-2137 〒192-0397 八王子市南大沢1-1（所在地省略可） 東京都立大学 人文学部 国文学研究室
--